武蔵野日曜聖書講筵

エルサレムの使徒会議に於けるパウロの証言

――使徒行伝第15章――

１９９１年10月6日
小池辰雄

パリサイ派の割礼　福音か律法か　聖霊が与えられた信仰　即神の世界　十字架は我無き世界
を与える　伝道は証言　主イエスの恩恵に由る　神の幕屋　捨て身の伝道

【使徒15】

1或る人々ユダヤより下りて兄弟たちに『なんじらモーセの例に遵(したが)いて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。2ここに彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大いなる紛争と議論と起こりたれば、兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上(のぼ)らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。3かれら教会の人々に見送られてピニケ及びサマリヤを経(へ)、異邦人の改宗せしことを具(つぶさ)に告げて、凡ての兄弟に大いなる喜悦(よろこび)を得させたり。4エルサレムに到り、教会と使徒と長老とに迎えられ、神が己らと偕に在(いま)して為し給いし凡ての事を述べたるに、5信者となりたるパリサイ派の或る人々立ちて『異邦人にも割礼を施し、モーセの律法を守ることを命ぜざる可(べ)からず』と言う。

6ここに使徒・長老たち此の事につきて協議せんとて集まる。7多くの議論ありし後、ペテロ起(た)ちて言う『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神は、なんじらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞かせ、之を信ぜしめんとし給えり。8人の心を知りたもう神は、我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証をなし、9かつ信仰によりて彼らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔(へだて)を置き給わざりき。10然るに何ぞ神を試みて弟子たちの頸(くび)に我らの先祖も我らも負い能わざりし軛(くびき)をかけんとするか。11然らず、我らの救わるるも彼らと均(ひと)しく主イエスの恩恵(めぐみ)に由ることを我らは信ず』

12ここに会衆みな黙して、バルナバとパウロとの己等によりて神が異邦人のうちに為し給いし多くの徴と不思議とを述ぶるを聴く。13彼らの語り終えし後、ヤコブ答えて言う『兄弟たちよ、我に聴け、14シメオン既に神の初めて異邦人を顧み、その中より御名を負うべき民を取り給いしことを述べしが、15預言者たちの言もこれと合えり。16録して「こののち我かえりて、倒れたる

ダビデの幕屋を再び造り、その頽れし所を再び造り、而して之を立てん。
17これ残余の人々、主を尋ね求め、凡ての我が名をもて称えらるる異邦人もまた然せん為なり。18古えより此等のことを知らしめ給う主、これを言い給う」とあるが如し。19之により我は判断す、異邦人の中より神に帰依する人を煩わすべきにあらず。20ただ書き贈りて、偶像に穢されたる物と淫行と絞殺したる物と血とを避けしむべし。21昔より、いずれの町にもモーセを宣ぶる者ありて安息日毎に諸会堂にて、その書を読めばなり』

22ここに使徒・長老たち及び全教会は、その中より人を選びてパウロ、バルナバと共にアンテオケに送ることを可しとせり。選ばれたるは、バルサバと称うるユダとシラスとにて、兄弟たちの中の重立ちたる者なり。23之に托したる書にいう『使徒および長老たる兄弟ら、アンテオケ、シリヤ、キリキヤに在る異邦人の兄弟たちの平安を祈る。24我等のうちの或る人々われらが命じもせぬに、言をもて汝らを煩わし、汝らの心を乱したりと聞きたれば、25我ら心を一つにし人を選びて、26我らの主イエス・キリストの名のために生命を惜まざりし者なる、我らの愛するバルナバ、パウロと共に汝らに遣すことを可しとせり。27之によりて我らとユダとシラスとを遣す、かれらも口づから此等のことを述べん。28聖霊と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝らに負わせぬを可しとするなり。29即ち偶像に献げたる物と血と絞殺したる物と淫行とを避くべき事なり、汝等これを慎まば善し。なんじら健やかなれ』

30かれら別を告げてアンテオケに下り、人々を集めて書を付す。31人々これを読み慰安を得て喜べり。32ユダもシラスもまた預言者なれば、多くの言もて兄弟たちを勧めて彼らを堅うし、33暫く留まりてのち、兄弟たちに平安を祝せられ、別れを告げて、己らを遣しし者に帰れり。〔24なし〕35斯てパウロとバルナバとは尚アンテオケに留まりて多くの人とともに主の御言を教え、かつ宣べ伝えたり。

36数日の後パウロはバルナバに言う『いざ我らさきに主の御言を伝えし凡ての町にまた往きて兄弟たちを訪い、その安否を尋ねん。』37バルナバはマルコと称うるヨハネを伴わんと望み、38パウロは彼がかつてパンフリヤより離れ去りて勤労のため共に往かざりしをもて伴うは宜しからずと思い、39激しき争論となりて遂に二人相別れ、バルナバはマルコを伴い、舟にてクプロに渡り、40パウロはシラスを選び、兄弟たちより主の恩恵に委ねられて出で立ち、41シリヤ、キリキヤを経て諸教会を堅うせり。

●パリサイ派の割礼

前の所で、14章でパウロが第一回の伝道旅行を終ったわけです。アンテオケに帰ってきた。それから、パウロはエルサレムで使徒たちの会議に臨むわけです。それがこの15章。

[1]或る人々ユダヤより下りて兄弟たちに『なんじらモーセの例に遵(したが)いて割礼を受けずば救わるるを得ず』と教う。

「或る人々」というのはユダヤ教のパリサイです。パリサイはモーセの律法に非常に忠実な連中ですから、

「異邦人といえども割礼を受けなければダメだ」と。

[2]ここに彼らとパウロ及びバルナバとの間に、大いなる紛争と議論と起こりたれば、

もう、当然です。

兄弟たちはパウロ、バルナバ及びその中の数人をエルサレムに上(のぼ)らせ、此の問題につきて使徒・長老たちに問わしめんと定む。

「エルサレム本山ではどう思っているか」というわけですね。

[3]かれら教会の人々に見送られて

というのは、これは回心した連中です。その中にはユダヤ人もいるし、異邦人もいる。

ピニケ及びサマリヤを経(へ)、異邦人の改宗せしことを具(つぶさ)に告げて、凡ての兄弟に大いなる喜悦(よろこび)を得させたり。

途中でも、やっぱり証言をしながら歩いているわけです。

[4]エルサレムに到り、教会と使徒と長老とに迎えられ、神が己らと偕(いま)に在して為(な)し給いし凡ての事を述べたるに、[5]信者となりたるパリサイ派の或る人々立ちて『異邦人にも割礼を施し、モーセの律法を守ることを命ぜざる可(べ)からず』と言う。

同じようなことを、やっぱりパリサイが言っているわけだ。ここにはもう、新しい

「エクレシア」

という言葉が出てますね、

「教会」

というのは。だから、ユダヤの「シナゴーグ」とは違うわけです。これは福音の方です。「長老」とは、年取ったいわゆる長老ですな。「使徒」の次が「預言者」という。それから「教師」。同じ「預言者」という言葉を使っても、旧約の預言者とは違う。ここには「預言者」は出てませんが。

「神が己らと偕に在(いま)して為(な)し給いし凡ての事」

パウロはもちろん、伝道を全部、神・キリストの力によってしているというはっきりした意識ですから、単に自分がやっているなんては思っていない。だから、「神の業」です。

神さまが一緒にいて、為し給いし凡ての事。

「神に於けるところの業だから、これは我々の自分たちの主観ではない」

ということで、本当の確信を持っているわけです。ところが、「信者となったパリサイ派」が――本式の「信者」ではないね、こんなのは――

「異邦人にも割礼を」

と。まだ旧約の律法の世界から抜け切らない。だから、

「モーセの律法を」

と言う。まぁ、ユダヤ人にとっては、

「トーラー」「律法」

というのは、ある意味に於て「預言者」以上に力を持っている。ある意味に於て、今のユダヤ人でもそうです。旧約を読みながら、本当の預言者を分かっていない。だから

「割礼を」

と言う。

●福音か律法か

内村先生が、

「教会でやるところの洗礼は要らん、信仰のみだ」

というのが、

「無教会」

なんですけれども。

「いわゆる洗礼という形式的なものはダメだ」

と。「割礼」もそういう意味でね。

福音の世界は律法に縛られないわけです。神の言、活ける神の言によって、聖霊の働きでもって動いている。聖霊のないところには、本当の自由がないですから。これはパウロが言っているとおり、

「御霊のある所に自由あり」

と。この「自由」というのは普通の常識でいう自由とは違う。聖霊における自由、神の言に於ける自由です。「神の言」も、パウロが、

「それを儀文としてはいかん。常に御霊をもって神の言の内容を受けとっていかなくはいかん」

と言う。言葉づらではない。それが本当の自由の世界だと。いわんや、この割礼の問題は、

「割礼があってもなくても、それは信仰には関わりない。ユダヤ人が割礼をするのはご勝手だが、信仰の世界はそれに限定されるものではないんだ」

と。もうそこがはっきりしているわけです。だから、ここではどうしても、

「福音か、律法か」
の戦いです。
パウロはキリストにひっくり返された。もともとパウロはパリサイ人の権化でしたからね、チャンピョンでしたから。それが完全にひっくり返って、反パリサイになったわけです。
「パリサイ」
というのは
「特別に分かたれたる者」
という意味ですが、だけれども、キリストによると、本当に分かたれたる者は、この「キリスト者」なんです。旧約の「パリサイ」とはおよそ違う。

6 **ここに使徒・長老たち此の事につきて協議せんとて集まる。7 多くの議論ありし後、ペテロ起ちて言う**

やっぱりゴタゴタやっているんだね。ペテロは何といっても、使徒たちの長老ですから。既にペテロはサマリヤの方を伝道しています。その伝道はもちろん、使徒行伝の始めの方で出ているとおり、ペテロは福音書のペテロとはおよそ違ったペテロです、聖霊のペテロですから。パウロとそこのところは同質です。質が同じです。

『兄弟たちよ、汝らの知るごとく、久しき前に神は、なんじらの中より我を選び、わが口より異邦人に福音の言を聞かせ、之を信ぜしめんとし給えり。

だいぶ前に神さまに選ばれたと。具体的には、キリストです。ペテロの伝道は、前にコルネリオがひっくり返されたでしょ。
「私がやったのではない」
と。

●聖霊が与えられた信仰

8 **人の心を知りたもう神は、我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証をなし、**

もうユダヤ人も異邦人もないんだ、
「およそすべての人は同じく」
と。「ギリシヤ人」という言い方は「異邦人」ということです、ギリシヤ語を語る連中という意味です。当時の世界語はギリシヤ語ですから。今は英語がそうですが。それだから、聖書はギリシヤ語で書かれているわけです。世界語で書かれている。

「人の心を知りたもう神」

という。およそ人間の心を知っていらしゃる。

「我らと同じく、彼等にも聖霊を与えて証をなし」

と、いわゆる割礼のないご連中にも、聖霊を与えて証をなす。これは大事なことです、8節は。

「証(あかし)をする」
というのは、「マルトゥレオー」という字ですが、
「マーター」「殉教者」
の「殉教」という言葉と同じで、「証し人」という意味です。「教えに殉ずる」ということは「証する」ということ。それは言葉と行為と両方です。

9 **かつ信仰によりて彼らの心をきよめ、我らと彼らとの間に隔(へだて)を置き給わざりき。**

はっきりしている、ペテロの言うことは。パウロと同じです。
「隔てはないんだ。異邦人も何もないんだ、全部、人間だ。神さまの民なんだ」
と。
「聖霊を与えて」
ということと、
「かつ信仰によりて」
ということ。聖霊が与えられないと実は、信仰は本ものにならないです。ウソとは言わないけれども、観念なんです。私は、無教会時代の信仰はウソじゃない、スジはいい。スジはいいんだけれども、やっぱり観念なんでね、何か足りないと思っていた。どうも力が来ない。
「信仰、信仰」
と言うけれども。
「信仰のみ」
と、やっているわけだ、無教会は。それは「信仰」でいいんですよ。いいんだけれども、信仰が本ものであるためには、聖霊が来なければ本当の力を持った信仰にならない。
本当の感動を与えるような話を、教会の牧師さんはやってないわけです。聖霊が無いようなのは、本当は牧師になれないんだ。私はここで集会を始めた時は、始めは無教会信仰だったからね。１９４０年に始めて、１９５０年に私はひっくり返ったんだから、始めの10年間は、ここでいわゆる「研究」の角度、いわゆる「自分の信仰」の角度でものを言っていたわけだ。間違いじゃない、ウソじゃないけれども、しかし、そこには本当の力はなかった。
塚本先生も、無教会では立派な聖書研究家で、
「日曜日の話をすると後はもう疲れてしまって、月曜はもぬけの殻だ」
なんておっしゃったから、そういうものかと思ったが、そうじゃないんだ。我々は、集会すると、聞くも語るも同じこと、終りには力を得る。キリストの中に安息するとは力を得ることなんだ。
内村先生は、或る力を持っていたです。或る力を持っていたけれども、やっぱりそこまでは来ていないんだよな、これが。私は、心は感動したけれども、魂のゆり動かしまで来

なかった、内村先生の時といえどもね。けれども、とにかく先生は力のある方だから、みんな非常に喜んで集会に行っていたわけだ。私も行っていたわけだ。

藤井先生もそうです、家庭集会でね。先生も頭で言ってない。体験から言っています。けれども、やっぱり、ちょっと聖霊以前なんだ。惜しいんですよ、無教会は。或るところまでは、聖霊に接線しているが、接してはいるんだけれども、中に入ってこないんだからな。

●即神の世界

だから、ペテロははっきりと、聖霊を与えられて証をした。聖霊におけるところの信仰である。キリストを受けざるを得ない。だから、私は、「信仰」は

「信受」

と言いたい。「受ける」という言葉を使いたい。或は

「体受」

体（からだ）で受けとっている。頭で信じ、

「仕方がないから信じておこう」

なんてのは信仰でも何でもない。８節、９節はそういう意味で大事な節です。

「心をきよめ」というと、「きよめ」はまたいわゆる「きよめ」だとすぐ思う。私は、「心がきよめられる」ということは、

「私が無い、私心が無い」

ということ、これが「きよめ」だと思っている。私心が無くなること。

私心が有るのが「肉」なんです。私心が無くなっているのが「霊」です。霊の世界が即ち「私心なき世界」。自分が投げ出されている心。

「さぁ、この心はきよいか、汚れているか」

なんて、そんな分析する必要はない。私心が無くなれば、キリストに即している心になるからね。それがまた「自由」なんだ。

「自由」

と、

「私心無いこと」

とは同じことだ。キリストが動くんだ、聖霊でもってね。本当に

「信じている」

ということは

「受けとっている」

ということ。信仰が何か「信念」になったり、きよめが何か汚れとの対照の「きよめ」になったり、そんなことではない。知情意のいろんな要素というのは、神さまがくれた人間の要素だもの。それが私心なき動きをしているわけだ。だから、非常に豊かな気持ですよ。

「きよめ」
という言葉が、どうも躓きになるんだよな。私心なき神・キリストにつける心、
「即神」
の世界だ。神に即する。
「**神の相（すがた）に造られた**」
というのは、「即神」なんです、あれは。「似姿」という言葉は、私はもう止めた。「似姿」という言葉をよく使うね。「似て」いるのではない。「即して」いる世界です。
「**人間は神の相に即して造られた**」
ヘブライ語の「カ」という字は「に似る、の如き」という字ですが、「ヴェ」というのは「に即する」という字んです。「ヴェ」が使ってある。
「**ヴェ・ツェレム・エロヒーム**」
と書いてある。「ミカエール」という天使があるね。ヘブライ語の「ミ・カ・エール」という字は、「ミ」というのは「誰か」、「カ」は「如し」、「エール」は「神」という意味で、
「誰か神の如くあらんや」
"Who is like God?"
という意味です。「誰か神の如くあらんや」でなくて、
「ミ・ヴェ・エール」
「誰か神に即してあらんや」
と、本当に神に即しきってしまったのは、キリストだけです。我々は、本質的に神に即して造られたんだけれども、そこからパラダイス・ロストになってしまった。それから離れてしまった。せいぜい「神の如く」と。
ところが、この「神の如く」というのがサタンの言葉なんです。
「お前たちは、そうやると、神の如くなるぞ」
と、いざなう。「如く」というと、
「私は神のようになった」
なんていって、今度は高慢になる。これがサタンなんです。「自分は神の如し」なんて思っている。冗談じゃない。
即するためには、自分が棄てられてなければならない。それが「きよき心」ということ、我なき心。その「我無き」がなれない。その「我無き」の「無さ」を、この「無」の世界を十字架がたまわった。

●十字架は我無き世界を与える

そこらにいくと、手島さんは、私とそこのところが違った。手島さんは最期に、
「私の十字架は間違っているでしょうか」

なんて、私に聞いたから。手島さんの十字架は、神の血が、キリストの血が、贖いの血が、これが生命だから、それを自分が受け継ぐ、飲むという。キリストが、

「わが肉をくらえ、わが血を飲め」

と言ったでしょ。あの最後の晩餐の角度が、原始福音の連中の贖いの角度なんだよな。それも一面です、もちろん。

一面だけれども、大事なのは自我がすっ飛ばされるところ、それが贖罪の中心なんだ、本当は。即ち、

「我無き世界を十字架が与えた」

ということ。我無き世界を与える。これが贖いの中心なんです。我無き世界に、キリストの生命が来た。それは、復活のキリストが、

「我を食らえ、我を飲め」

「この復活の生命を受けよ」

と。この十字架の我無き世界にいくと、今度は聖霊が入ってくるから、そうすると、血を飲んだと同じ世界に入ってしまう。「我を食らえ、我を飲め」は、聖霊を受けとると、聖霊の質はそういう具体的なものを持っている。霊血になる。霊の血になる、霊の肉になる。これが、パウロがコリント前書15章で言っているところの本当の復活の世界です。

「血気の体あり、霊の体あり」

とパウロが言っているのはそのことです。

いやぁ、パウロという人は素晴らしいです、何といっても。パウロは本当の意味でキリストを受けとっているね。渾然（こんぜん）たるものです。「パウロ神学」といったって、頭の神学ではないですから。私は

「無の神学」

なんて言うと、これがまた躓きになるんだよな。だから、あまり「神学」と言わない方がいいかもしれない。大体、普通の神学はみんな観念的だから。だから、組織神学から私は出てしまった。有機体的な神学はそんなものではない。だから、右に向いても左に向いても私は味方がいないわけだよな。仕方がない。パウロさんは、使徒たちは本当の味方だ、特にパウロは。

ヨハネは十字架の面が弱い。弱いけれども、無いわけじゃない。もちろん、

「我らの罪を負ったひとだ」

ということは言っているけれども、「十字架」という言葉を使わないんだ、あのヨハネは。スーッといくからね、あのヨハネというのは。スーッと即してしまう。

ヨハネ型、パウロ型、ペテロ型と、クリスチャンにはこの三通りの型があるよ。私にはどれもあう。ヨハネもペテロもパウロも。だから、どれを読んでもよく分かる。まぁ、困った人間だよ、この小池というのは。どれでもこざれと。本当の聖霊の世界にはいると、ど

れでも本当につかめるんです。

だから、そのことは何としても、詩でもって私は表現せざるを得ない。大体2000行くらい書いたけれどもね。まだ10年かかる。12000行のうち、今

「先生はあと10年生きれるんですか？」

なんて。僕が生きるんではない、キリストが活かすんだ。これを証しないではいられないわけです。大事なところですよ、この８節、９節は。

●伝道は証言

10 **然るに何ぞ神を試みて弟子たちの頸（くび）に我らの先祖も我らも負い能わざりし軛（くびき）をかけんとするか。**

「我らも負い能わざりし軛（くびき）」とはモーセの律法のことです。

「律法でもってまた縛るか。冗談じゃないぞ」

と。キリストは律法から私たちを解き離してくださった。しかし、律法も本当は、律法ではなかったんだ。神の断言であった。

「殺すなかれ」

ではなく、本当は、

「お前は殺人しない」

という言葉だった。

「私はお前の神だから、お前は殺人なんかしないね」

と、信頼しているんです。神さまは我々を信じ愛している。親子関係だって、信愛がなかったら、親子関係は崩れてしまう。今、日本の家庭がどうもおかしくなっているのは、この信愛関係が崩れているから。間違った民主主義がのさばっているから、冗談じゃないよ。社会的な構造に於ては、民主主義はひとつの真理です。けれども、民主主義も、日本の民主主義ではダメだよな。

「アンダー・ゴッド」「神さまの下における」

民主でないから。神抜きの民主だから、お互いにゴタゴタやっている。キリスト教国といえども、だいぶそれが崩れている。

ゴルバチョフのペレストロイカは、ゴルバチョフ自身が、

「この共産党では、私はもうこんな観念では行き詰まってしまう、こんな唯物主義では」

と、彼自身が心の中でひっくり返ったんだ。彼自身が心の中でペレストロイカが起きたから、それが外に表れて、あのような改革になったんですよ。マルチン・ルターだって、そうでしょ。彼の心が本当に、

「十字架はわがためである」

ということが分かって、ひっくり返ったから、宗教改革になった。一番大切なのは魂の問題なんです。魂がひっくり返ると、外にそれが現じていけば、そこが変わっていく。だから、日本の教育はいくら制度を変えたってダメなんだ。悪くはないよ、変えることは結構だ。けれども、先生の心がひっくり返らない限り、本当の教育はできない。私は詩の中にもう既に書いているからね、そういうようなことは。政治家だって、そうだよ。今度の『エンクリスト』48号（１９９１年10月秋季号「編集だより」）にも書いた。

「ソ連のゴルバチョフは今世紀後半の政治家中の第一人者である。彼自身の魂の世界にペレストロイカが起きたので、それが爆発して東西ドイツの鉄のカーテンが崩壊した。更に波及して東ヨーロッパが変貌してきた。かつてルターの魂にペレストロイカが起きて宗教改革となったように。初秋のある晩、夢の中でブッシュさんとゴルバチョフさんを前にして、「あなた方お二人が本当に握手をして協力して世界に偽りのない平和を来らせてください。あなた方のような神に平伏して魂に平安を有っている政治家でなければ、本当の平和を実現できませんからね」とまるで預言者のように言ったら、ニコニコしていた。眼がさめて何でこんな夢を見たかと思った。日本の政治家たちへの嘆きの反映だったのだろう。」

問題は、いわゆる聖書解釈とかいわゆる神学とか、そういうことではない。パウロの伝道は、どこまでも神・キリストに動かされて、

「それは神・キリストがなさった事の、自分を通して為し給うた事の証言だ」

と。伝道は証言なんです。証言であり、また、行為をもってする証なんです、パウロにとっては。宣教の結果をお説教しているのでは絶対にない。

私の日曜日の話は告白なんだ。説教ではない。ところが、普通の牧師さんはみんな、ただ参考書を読んで研究して、ごもっともな事を言っているだけのはなしです。

●主イエスの恩恵に由る

11然らず、我らの救わるるも彼らと均(ひと)しく主イエスの恩恵(めぐみ)に由ることを我らは信ず』

キリストの恩恵の力だと。恩恵という言葉も、恵はみんな力があるですよ。信仰の、福音の世界は、

「福音は言葉にあらず、力なり」

とパウロが言っているのは、そのことなんだ。パウロの書簡の中に書いてある。あなた方は何をしていても、どういう仕事をしていても、

「力があるのは、この福音の、聖霊の、神の言のお陰さまでございます」

というわけで、あなた方は日常生活をやっているわけだ。でなければ、くたびれてしまうよ、力んでいる力では。人それぞれの、みんな賜物(たまもの)があるんだよ。その特色が、御霊で活かさ

れている。それを信仰がつけたりになって、

「私の信仰は、私の信仰は」

とやっているんだ、普通は。疲れてしまうよ、そんな信仰は。だから、私は逆に、

「信仰なんかありません」

と言うんだ。

「主イエスの恩恵による」

と、正にそうです。

「主イエスの力ある恵によることを我らは告白します」

と。「信ずる」なんて言わなくたっていい。

「我らは告白します」

でいいんだ。こういう聖書の言葉がまた躓きになるんです、読む方で観念化してしまって。読む方が体験していないと、すぐそれが観念化してしまう。

12**ここに会衆みな黙して、バルナバとパウロとの己等によりて神が異邦人のうちに為し給いし多くの徴と不思議とを述ぶるを聴く。**

全くそうなんだ。全部、証言なんです。「神、神」というが、「キリスト」ということは余り出てないけれども――いま、「イエスの恩恵」というのは出てきたけれどもね。

13**彼らの語り終えし後、ヤコブ答えて言う**

このヤコブはキリストの兄弟です。キリストが生きているうちは、ダメだったんだが、やっと救われたんだよね。キリストの兄弟の弟のヤコブでしょう。

『兄弟たちよ、我に聴け、14**シメオン**

「シメオン」とはペテロのこと。

既に神の初めて異邦人を顧み、その中より御名を負うべき民を取り給いしことを述べしが、預言者たちの言もこれと合えり。

旧約の預言者たち。預言者は律法と違う。

●神の幕屋

16**録して「このの ち我かえりて、倒れたるダビデの幕屋を再び造り、その頽(くず)れし所を再び造り、而して之を立てん。**17**これ残余(のこり)の人々、主を尋ね求め、凡ての我が名をもて称えらるる異邦人もまた然せん為なり。**18**古(いにし)えより此等のことを知らしめ給う主、これを言い給う」とあるが如し。**

そこまでが預言者の言葉。これは実は、アモス書9章11～12節の所に出ている。そこを私は調べてみると、

「古えより此等のことを知らしめ給う」

の「知らしめ給う」という訳は間違っている。

「なさしめ給う」
です。或は、旧約では、
「神さまは為した」「為したまいし、為したもうところの」
と書いてある。

「其日には我ダビデの倒れたる幕屋を興(おこ)しその破壊(やぶれ)を修繕(つくろ)いそのくづれたるを興し古代の日のごとくに之を建てなおすべし。而して彼らはエドムの遺残者(のこれるもの)および我名をもて称えらるる一切の民を獲ん。此事を行うエホバかく言うなり」（アモス9・11～12）

「此事を行うエホバかく言う」
「このことを為すエホバかく言う」
と。これはアモスの預言です。まぁ、ここの所はアモスではなく別な預言者だと言う学者もいますけれども。もちろんアモスは、ダビデの方が先だから、そのことを書いたってわるくはないけれども。

「こののち我かえりて」

というのが、面白いでしょ。神さまが上から降りてきて、向きを変えてやってくることをみな、
「かえる」
という言葉で使っている。「向きをかえて」ということなんだ、本当の言葉は。「シューブ」という言葉は、
「神さまは向きをかえて」
ということ。「かえる」というのは、しかし、いい言葉ですよ、日本語としては。
「ダビデの幕屋」というのは、非常に素朴なものです。けれども、ソロモンは大きな神殿を建てたでしょ。
「神殿は、そんなものは要らないんだ」
と、サムエルをして言わせているところがある。「幕屋」は動的なものですから、私はそのことで、「幕屋」と言いだしたんだけれども。神さまの歴史は幕屋を張りながら展開していく。イスラエルの曠野の旅みたいに、世界の歴史は、神さまが幕屋を張りながら一緒に進んでいく。最後に、黙示録の終りの方にも、「神の幕屋」という言葉があるでしょ。だから、私のところは
「武蔵野幕屋」
なんだ。

19 之により我は判断す、異邦人の中より神に帰依する人を煩(わずら)わすべきにあらず。

その通り。

20 **ただ書き贈りて、偶像に穢されたる物と淫行と絞殺したる物と血とを避けしむべし。**

絞め殺すと、まだ血が一緒なんです。そうすると、血と肉が一緒のものは、イスラエル人はこれは食ってはいけないんです。

「血は生命のあるもの」

と。だから、肉を食べる時には血があってはいけない。創世記9章に書いてある、

「血は生命のあるところだから大事にしなくてはいかん」

と。

「その生命を私はお前にやる」

というのが、キリストの最後の晩餐の言葉なんだ。

「わが肉を食らえ、わが血を飲め」

とは、キリストでなければ、あんな凄いことを言えないわけだ。

仏教の世界は、悟りの世界だから、およそそういう具体的なのとは違う。仏教はむしろ、どちらかというと、哲学です。

だから、絞め殺したのはダメだと。切り裂いて、血は別に流して、それで肉を食らえと。シェークスピアの『ベニスの商人』に出てくるね。

21 **昔より、いずれの町にもモーセを宣ぶる者ありて安息日毎に諸会堂にて、その書を読めばなり』**

それはまぁ、律法の中にも書いてあるから、そういうことは福音の世界で充分守れるからと。

●捨て身の伝道

22 **ここに使徒・長老たち及び全教会は、その中より人を選びてパウロ、バルナバと共にアンテオケに送ることを可しとせり。選ばれたるは、バルサバと称うるユダとシラスとにて、兄弟たちの中の重立ちたる者なり。**

ユダというのは、むしろユダヤ派。それから、シラスというのはギリシャ派、異邦人派。だから、ユダの方が先に書いてある。シラスは、後からずっとパウロと一緒にいた。

23 **之に托したる書にいう『使徒および長老たる兄弟ら、アンテオケ、シリヤ、キリキヤに在る異邦人の兄弟たちの平安を祈る。**24 **我等のうちの或る人々われらが命じもせぬに、言をもて汝らを煩わし、汝らの心を乱したりと聞きたれば、**25 **我ら心を一つにし人を選びて、**26 **我らの主イエス・キリストの名のために生命を惜まざりし者なる、我らの愛するバルナバ、パウロと共に汝らに遣すことを可しとせり。**

ここは、非常にはっきりしているね、この26節は。

「我らの主イエス・キリストの名のために生命をも惜まなかったところのバル

ナバとパウロ」

と。「名のために」は、「名に在って」という言葉が隠されていますけれども、ここではもちろん「名のために」「ヒュペル・トゥー・オノマトス」と書いてあります。名になければ、「名のために」はできない。「名に在る」ということが先です。

「キリストの名に在って」「エン・クリスト」のことです。26節が大事な節だね。本当の捨て身の伝道をしたというわけです。本当にそうだよ、パウロは。

27之によりて我らとユダとシラスとを遣す、かれらも口づから此等のことを述べん。28聖霊と我らとは左の肝要なるものの他に何をも汝らに負わせぬを可しとするなり。29即ち偶像に献げたる物と血と絞殺したる物と淫行とを避くべき事なり、汝等これを慎まば善し。なんじら健やかなれ』

30かれら別を告げてアンテオケに下り、人々を集めて書を付す。31人々これを読み慰安を得て喜べり。32ユダもシラスもまた預言者なれば、

ここに「預言者」がでている。即ち、「使徒」の次に属する連中が「預言者」です。

多くの言もて兄弟たちを勧めて彼らを堅うし、33暫く留まりてのち、兄弟たちに平安を祝せられ、

ここにも「平安」と書いてあるからね。

別を告げて、己らを遣しし者に帰れり。〔24なし〕

非常に詳しく書いてあるね、読んで字の如しです。

35斯てパウロとバルナバとは尚アンテオケに留まりて多くの人とともに主の御言を教え、かつ宣べ伝えたり。

36数日の後パウロはバルナバに言う『いざ我らさきに主の御言を伝えし凡ての町にまた往きて兄弟たちを訪い、その安否を尋ねん。』37バルナバはマルコと称うるヨハネを伴わんと望み、38パウロは彼がかつてパンフリヤより離れ去りて勤労のため共に往かざりしをもて伴うは宜しからずと思い、39激しき争論となりて遂に二人相別れ、バルナバはマルコを伴い、舟にてクプロに渡り、40パウロはシラスを選び、兄弟たちより主の恩恵に委ねられて出で立ち、

41シリヤ、キリキヤを経て諸教会を堅うせり。

バルナバは自分の故郷のマルコを連れてクプロに行ってしまった。パウロはシラスを選んでまた出掛けて行った。諸教会を堅しながら、今度は第二の伝道が16章から始まるわけです。どこまでも、パウロは確かめて、そしてまた、崩れないようにしようと、こういうわけなんだ。まぁ、しっかりしているよ、パウロというのはね。

では、おしまい。